

末黒野

すぐろの

12月号 (通巻832号)



紫苑

小川 玉泉

(名譽主宰)

隣よりみどり児の声夕木槿
わが背丈超ゆる紫苑や茎強し
廃校の桑の葉ゆたか秋日和
月光の染むる岩陰残る虫
夕餉終ふ秋冷まとふ膝頭
初鴟や泉下の妻に届きしか

わが背丈超ゆる紫苑や茎強し

北隣の地境に毎年育つ紫苑は今年も秋彼岸を前にして花を付けた。茎の高さは優に二メートルはある。台風に遭いながらも一センチ余りのざらざらした茎から花茎を伸ばし、日差しを浴びて咲き誇る、強い茎である。墓参りにはいつも携えて行く花である。小さい蝶が次々と、忙しく蜜を吸っては去る。秋の深まりを告げる花で筆者の好きな花の一つ。

北陸金沢

松本三千夫

苔生うる石山白し萩の雨
(那谷寺)

杉風蒼芭蕉座像や爽やかに
(金昌寺)

朝露のこおろぎ橋の瀬音かな
鶴仙溪

走り根を跨ぐ山路や秋の声

瀬の音の二段三段薄紅葉

山の音瀬の音秋を深めけり

金沢

土堀より柿の実覗く武家屋敷

松澄みて琴柱灯笼水の秋

日を零す根上がり松や秋のこゑ

紅萩の雨に打たるる風情かな

夜寒さの浅野川べり加賀料理

冷やかや展示芭蕉の頭陀袋

(県立美術館)

露のこゑ

黒滝志麻子

(副主宰)

新松子まぶしき海の夜明けなる
何もかも洗ひたき日や秋日和
色香にもまさる齒ざはり菊脛
山道を誰か先ゆく露のこゑ
尋ね行く家の目印烏瓜
色鳥に開け放ちたる厨口
蜻蛉や長男次男左利き
木洩れ日や古刹の庭の薄紅葉
山影の切り込むさまや晩稻の香
蚯蚓鳴く鼻先にある山の闇
行く先はいつもの池畔大花野
芋嵐二級河川の見えかくれ

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

処暑

石黒興平

雷鳴と停電共に来りけり
肩書なき暮し十年蟬の穴
為すことの無き戸惑ひや胡瓜もむ
田から田へ更にまた田へ落し水
清流や鯖鮎なれどきらめきぬ
牛の尾の動きの止まぬ残暑かな
鳶職のピアス光れり処暑の風
なほ闇を濃くして烏瓜の花
雲の影ゆつくり過ぎる花野かな
しなやかに指先伸ばし踊の輪

星月夜

大橋伊佐子

秋立つや煮上がるスープ透きとほり
星の数増え来る空や夜の秋
まのあたり一葉落ちたる虚ろかな
星飛んで山荘の闇深めけり
光年といふものさしや銀河濃く
清冽の水走りけりお花畑
渚行く二人の影や星月夜
あだし野に見えぬ雨降る白桔梗
灯下親し眼鏡二つを使ひわけ
朝市のもろこし青き匂ひかな



白陀師忌

田中臥石

四季咲の薔薇や台風沖へ逸れ
罌雲海を抑へてひろごりぬ
台風の水漬ける稲を起こしをり
新米や今年不作と娘言ひ
秋澄むやきりりと味噌の樽の籬
横浜は遠し上嘆くちちろ虫
新米を炊きをり突と地震来る
小祥忌の秋霜寺の屋根走り
稿の端へ仄と月射す十三夜
農捨てて来しと霜夜の警備員

秋風

松田泰子

目薬の文机にある九月かな
手鏡に真顔横顔ありて秋
初秋の小さき波を波の消す
秋風やバスに乗るまで山を見て
桔梗や男同士が椅子頷ち
熱々のおしぼりが出て萩の宿
にこにこと甘党ばかり鳳仙花
風立ちて芙蓉は暮色生みにけり
見送りて芋の露見て帰りけり
月を待つ顔を拭へり蒸しタオル

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



沢 桔 梗

菅野日出子

噛み合はぬ孫との会話秋の雷
白桃をすすり父祖の地近うせり
いまあらば兄は白寿や敗戦忌
矢狭間を抜け来る風や涼新た
水浴びの鳥の羽音や沢桔梗
神苑に日の斑ちりばめ名の木散る
塔頭の昼の竹林鉦叩

涼 新 た

加藤 静 江

稲 の 花

斉藤マキ子

堰越ゆる勢ひのまま水澄めり
かすかなる虫の音静寂深くせり
ほどほどの暮し諾ひ涼新た
朽ちかけの小さき木橋や沢桔梗
古倉の鼠返しや豊の秋
秋霖や混み合ふ里の道の駅
果てみえぬ唐黍畑風渡る

抽出しに考の勲章敗戦日
盆をどり意外や夫のふりのよき
かなかなや絶版となる校友誌
五男五女産みし妣なり稲の花
かさばれる駄菓子の袋地藏盆
うそ寒や使ひ勝手のよき小鍋
母の忌を修す一壺や秋の色

青炎集

松本三千夫選



横浜

長尾タイ

横浜

谷貝美世

木曾川の流れ豊かや蕎麦の花
卯建上ぐる今宵の宿や新豆腐
水澄むや木曾路の紡ぐ宿場町
胡桃落つる峠古りたる翁の碑
産土の苔むす磴や賜猛る
稲の花祠へ続く道細り

横浜

小田嶋野笛

迷路めく吾が静脈や夏惜しむ
病歴も酒の肴や暑氣払ひ
月見草紅さす刻を誰も知らず
立秋の今朝は女の歩に戻る
新涼の猫鳴きながら伸び欠伸
秋茄子の紫紺の色は夜の色

噴水を浴びて直立女神像
炎天の大輪の薔薇棘隠し
夏果や訃報の電話重なりて
新涼の眠気を誘ふ木椅子かな
沖よりのわだつみの声敗戦忌
ひとときをシーバスの風秋高く

横浜

小沼糸み子

四辻や出合ひ頭に夜の神輿
心太思はぬ友の長話
高僧のちらと見えたり汗手貫
雑草と力くらべや蚊の名残
萩の花松陰邸の肖像画
穏やかなる東京湾や震災忌

横 浜 大橋弘子

磴なかばより溪谷の秋の風
雑草と言ふ名はあらし草の花
黙々と蟻の列なす原爆忌
峰雲や一礼深く球児去る
三陸の海の色なる秋刀魚焼く
障子貼る勸進帳のごと広げ

横 浜 太田良一

戦争の文字に種飛ぶ西瓜かな
切株に残る木の香や秋の風
秋天や河馬の欠伸の二分間
山風の休み処や芒原
棧橋に定期便欲し月の船
白球の消ゆる場外今日の月

横 浜 原 和 三

送り火や孝の足らざる末生まれ
灯点すやいよよ広がる踊の輪
竹林の深きに憩ふ秋暑かな
瘦身の一画像やつくつくし
奥つ城の苔むす大寺つくつくし
海風と波音かよふ花野かな

横 浜 阿部重夫

灯台を描く少年秋高し
塾終へて母とメールや秋の夜
鬼の子の養脱いでる日のありや
爽やかや歩き仲間の一人増え
秋天や伸び放題の庭の草
芒々と荻枯れ渡り古戦場

千 葉 及川信二

大雨の続く鬼怒川秋出水
晚酌に独りほろ酔ふ夜長かな
納骨の里の菩提寺曼珠沙華
金網に煙る目黒の秋刀魚かな
復興へ耐ふるみちのく蕎麦の花
出勤のそよ吹く風や秋冷ゆる

横 浜 鍋島武彦

街の灯を愛でつ港の舟遊び
白秋や白壁著き白鷺城
右かまくら左おほやま花すすき
無縁墓目立つ墓苑や曼珠沙華
雨上り早やも桜の薄紅葉
山ガールの腰の鈴音涼新た

耕 土 集

黒滝志麻子選



相模原 内田 梢

高原の木道走る秋の風

赤塚 篤子

鐘楼の木彫の古りぬつくつくし
萩咲けば又天折の友のこと

小蠹螂を手の平に乗せ睨み合ふ

サックスで歌う唱歌や秋うらら

ただいまの声を合図や秋刀魚焼く

長き夜やパズルで学ぶ四字熟語

萩の枝をくぐりて辿る寺の門

秋茗荷朝餉の膳に香り立つ

木犀や香りを運ぶ今朝の風

風浚ふ百日紅の花の塵

横浜 野村 重子

小さくも父母の乗りくる茄子の馬

北郷 和顔

烏瓜の花や夜会のドレスめき

黄昏の丘の起伏や秋に入る

あるなしの風を捉へて猫じやらし

霧笛聞く断崖黒きオホーツク

季の移り幽き虫の声聴けり

忍者村の色なき風や冒険子

炊きたての生姜飯の香夕厨

夕去りのシヨパンの調べ酔芙蓉

鯛雲ふつつ湧きし旅ごころ

田中 春江

ひぐらしを聞きて水面の暮れてゆく

中村 高也

憂きことを忘れて食ぶる初秋刀魚

植木切るとんぼの眼なく老化の目

数珠玉や母の手作りお手玉と

焼なすや男料理の酒肴

御所富有次郎めつぼう柿好きと

耳澄ます耳の虫やら庭の虫

萩の花うち敷く風の夕べかな

終戦日はき教師もまろくなり